

平成 22 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（C）一般

研究期間：2007～2009

課題番号：19520585

研究課題名（和文）近世神道史研究と「御広間雑記」のデータベース化

研究課題名（英文）The historical study of early modern Shinto and the compilation of the database of the contents of *Ohiromazakki*.

研究代表者

幡鎌 一弘 (HATAKAMA KAZUHIRO)

天理大学・付属おやさと研究所・准教授

研究者番号：50271424

研究成果の概要（和文）：神道の本所である吉田家の玄関帳「御広間雑記」元禄 12（1699）年～宝永 7（1710）年のインデックス約 6200 点を作成し、近世神道史研究を発展させるための基礎的作業を行った。あわせて、吉田家・白川家の対抗を考える上で重要な人物である臼井雅胤の活動と、臼井と一条兼香・道香によって創設された白川家八神殿の背景を明らかにした。さらに、17 世紀後半における神職による神仏分離の活動が祭礼の由緒の説明に影響を与えていることを示した。

研究成果の概要（英文）：I made about 6,200 indexes of *Ohiromazakki* (the diary of Yoshida house that is the Shinto Head house) from 1699 to 1710, and worked on the fundamental investigations for the historical studies of early modern Shinto. Next, I clarified the activities of Usui Masatane who is an important person when we analyze the rivalry between Yoshida House and Shirakawa House and background of the foundation of *Hassinden* (the hall of eight deities) of Shirakawa House by Ichijyo Kaneka and Ichijyo Michika. Furthermore I brought out that the Shinto priests' activities of *Shinbutsu bunri* (the separation of Shinto and Buddhism) in the latter half of seventeenth century affected the explanation of the history of the festival.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：宗教史、近世史、神道、吉田家、白川家、春日大社、臼井雅胤、データベース

1. 研究開始当初の背景

神道史・神社史研究は近世史にあって近年注目を浴びている分野である。神道の本所で

ある吉田家の玄関帳である「御広間雑記」に対する関心も高く、調査のために天理図書館で閲覧する人はかなり多い。しかし、膨大な

量である「御広間雑記」から自らが必要とする地域に関するデータを集めることはかなり難しい作業であって、多くの場合、目的を十分達成することはできないで終わっている。そのため、「御広間雑記」に記載された神職・神社のインデックスを作成し地域研究のニーズにこたえたいというのが、本研究の出発点である。

現状では、「御広間雑記」が近世の吉田配下の神職の動向全体を俯瞰する唯一の史料であり、その分析は重要である。しかし、申請者の経験では、地域の神社に吉田家の入門の記述や裁許状があるにもかかわらず、「御広間雑記」にはそのことが記されていないことがある。吉田家の内部でも、当主にまで申請が及ぶ場合と国掛レベルで処理されたりすることがあるかもしれないし、裁許状の日付の虚偽も考えられる。「御広間雑記」の記載を基準としつつ、現存する裁許状との比較によって、吉田家内部の組織を含めた支配の実態あるいはその論理をさらに深めうる可能性が隠されていると判断できる。

そのような問題関心から、研究代表者は、平成 15 年～17 年科学研究費『吉田神道家「御広間雑記」の記載項目のデータベース化と神道記録の研究』によって、データ作成の大枠と近世史における吉田家・吉田神道の位置づけについて分析した。ここでは、裁許状の発給という身分制論に収斂させるのではなく、祈祷や伝授などを含めて総体的に論じることを提案した。また、吉田家データベースには各地の研究者の関心が高く、研究の必要性について確信を持つことができた。

2. 研究の目的

以上のような問題関心から、本研究では前回の科学研究費からの課題を引き受けつつ、新たな論点を引きだして行ってきた。目的は大きく分けて 4 つに集約される。

(1) 「御広間雑記」のデータベース化。

記載されている神職・神社をデータベース化し、研究者にその情報を提供し、近世宗教史（神道史）研究を全体として底上げしていくことである。

(2) 吉田家の総体的な把握。

「御広間雑記」あるいはその他の吉田家関係史料から吉田家の組織等に目を向けることである。従来は神職支配に目を向け、吉田家そのものには関心が少なかった。

(3) 白川家の動向分析。

吉田家の動向分析は対抗する白川家との関係を無視することはできない。主に 18 世紀初頭と、白川家の地方神職支配の体制が整備された 19 世紀の初頭に焦点を当てて分析する。

(4) 地方の神職の動向分析。

本所の思惑とは異なった地方の動向についても特定の地域・神社を取り上げ、吉田・白川家を相対化しながら議論を深める。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するために、具体的に以下のように進めた。

(1) 「御広間雑記」はすでにマイクロフィルム化されているが、データベース作成作業及びデータと画像のリンクを考えて、マイクロフィルムをデジタル化する。研究協力者にデジタルデータを見ながら一次入力を依頼し、それを幡鎌が最終的に確認し、記載項目の体裁を統一する。

(2) 天理図書館所蔵吉田文庫をあらためて見直すとともに、吉田家家老であった鈴鹿家文書などの所在を確認する。

(3) 「白川家日記」（宮内庁書陵部蔵）を調査することで、吉田家と白川家の違いなどを分析する。

(4) 地方の神社については、①兵庫県加東市佐保神社、②奈良県春日大社に焦点を当てて分析する。

4. 研究成果

(1) 「御広間雑記」のデータベース化。

「御広間雑記」第 101 冊～第 153 冊（元禄 12 年～宝永 7 年）53 冊分のインデックス約 6200 項目（1 項目には冊コマ番号・年月日・神社名・神職名・地名・備考を登録）を作成した。冊子ごとに作成したデータを国単位に並べ替え、一覧表として、別途作成した成果報告書に掲載した。「御広間雑記」約 670 冊からみると不十分なものだが、前回の科研費とあわせ 80 冊のデータを作成したことで、わずかではあるが、研究の進展に資することができたと考える。全国各地の神職が吉田家を訪れていたことがわかるが、地域的な偏差も見出せる。それは明らかに 17 世紀後半の状況とは異なっている。領主の影響力の下、神職編成が確実にすすんでいる様子と、神道思想（垂加神道）の広がりとのずれがあると思われる。

(2) 吉田家の総体的な把握。

17 世紀に吉田家そのものは弱体化し、後見となった分家の萩原家・家臣の鈴鹿家によって支えられていた。吉田家の家老鈴鹿家の残存史料について把握することに努めた。残念ながら、過去の研究で用いられている鈴鹿家日記（「治定日記」）の所在は不明のままだったが、「中臣（鈴鹿）和之日記」が吉田文庫

に納められており、さらに寛永期から寛文期までの日記が吉田文庫とは別に天理図書館の所蔵となっていることがわかった。万治3年の日記は全文を翻刻し、『ビブリア』132号に紹介した。また、寛永期の日記については、翻刻の準備のため紙焼きした。

今回翻刻した万治3年部分での重要記事は、萩原兼従の死去とその前後の動向である。同年7月29日に遺言状が作られたが、飛鳥井雅章・鳥丸資慶などがその場に立ち会った。吉川惟足もその場にいたことは、「御広間雑記」同日条から推定できる。急遽清書された書物に兼従が奥判を加え、吉田兼連に渡されたが、死去の直前に和之が呼ばれ、奥判は和之に口授された。

兼従は、死去直前まで吉田家の行末を心配し、遺言によって一族の兼庵・兼英を牽制していた。兼庵との軋轢は、この年の7月ごろから始まっている。兼庵を通して位階を得た鞆祇園社司は、当時私に冠を付けたことが問題になっていた。鞆祇園社家は、その後正徳2年に吉田家から放門処分を受け、正徳3年に白川家から官位執奏を望むことになるが、そもそも吉田家とは好ましからざる関係にあったことになる。また、式外社には官位を勅許しないというルールが示されているが、実際にはそれが守られていない、などが争点となっている。

吉田家の神職支配が、一元化されなかったのは、多くの伝奏の存在など外在的な問題だけではなく、吉田家内部の人間関係が微妙に影を落としていたのである。

(3) 白川家の動向分析。

宮内庁書陵部所蔵の「白川家日記」について、宝永期から正徳期、および文政期について調査した。一方、吉田文庫中に臼井本とされた一群があり、これが白川家の初代学頭となった臼井雅胤家の蔵書・史料であることが明らかになった。臼井家はもともと吉田家に入入りし、雅胤は学頭として吉田家批判を展開した人物として名を知られている。雅胤は吉田家・白川家の間に立つキーパーソンであり、「白川家日記」に「兼香公記」「西宮神社神主日記」「稲荷社家日記」と付き合わせつつ、彼の活動を跡付けた。

臼井家は戦国期に祇園社の社家となり、その地位を固めていった。特に臼井定清は、17世紀後半に吉田家に入入りして吉田神道あるいは吉川神道を学んだ。公家と接触を持ち、公家サロンの末端につながる文化人として高いレベルにあった。こうした関係のなかで培われた文化的資本は、子の接伝や雅胤に引き継がれていった。

雅胤の兄臼井接伝は、独自に勉学を積み、兼連の信頼を得たことで、吉田神道あるいは吉田家の活動を深く知る立場に立った。獲得

した知識や情報によって、自らを吉田神道の正当な後継者として位置づけた。彼の立場からすれば、批判の原因はむしろ近世になって両部神道化したと考えられた吉田家側にあった。配下にありながら、神職などに独自に伝授を与え始めた活動が見咎められ、吉田家から破門され、若くして没した。しかし、残された吉田家・吉田神道に関する知識・情報が、接伝から雅胤へと引き継がれていった。

雅胤は、はじめ白川雅光王の信任を受けて学頭となり、雅冬王の時代にも引き続き学頭として活躍した。鎮魂祭を整備したのもこの頃だろう。さらに積極的に配下の神社にかかわるようになった。

公家サロンに入入りする力量ある者を召抱えていくことで、教学的にも組織的にも補強していく動きは、吉田家が召抱えた松岡雄淵、吉田・白川両家にかかわった平田篤胤の先駆的な存在である。しかし、雅胤は学頭として西宮神社に干渉するような積極的な活動が裏目となり、幕府のもとでの裁判に敗北して白川家を追放された。

雅胤は鎮魂祭・祈祷の力によって靈元院の信任を得て地位を復活させ、関白一条兼香に召抱えられた。兼香が雅胤を召抱えた理由には、靈元院に続き桜町天皇も雅胤に関心を持っていたことと、広い意味での神道に対する知識が豊富で反吉田の立場であったからである。具体的には鎮魂祭を行ないえたこと、彼の知識が朝廷内で準備が始まっていた大嘗祭の再復興に役立つと期待された、古典に通じた神学・儀礼に関するブレイン的存在だった。雅胤の復権は朝議復興の流れに棹指したものであろう。

そして、雅胤は、八神殿の神璽を元文2年閏11月28日に兼香に奉呈した。一条兼香はこれを受け取ってしまったことで、伯家神道の正統性を雅胤に与えかねない事態となった。兼香・道香父子は、白川家の家業を奪いかねない事態を避けるために、八神殿を屋敷内に抱え続けたのである。従来の白川家八神殿に関する理解は大きな修正が必要である。

雅胤の活動は、神代巻や記紀その他の古典によって導かれるべき神道の教義化という点では逸脱をはらんでいた。それは国家を論じるものでも、神社祭祀を行うものでもなく、むしろ第三の道、神道者にちかい救済の実践で、民衆宗教の教祖の姿と重なるころがあった。そして、このことは、近世後期の白川家の活動（幡鎌一弘「徳川時代後期の神道と白川家」『天理大学おやさと研究所年報』12号、2006年）を規定していると考えられる。

(4) 地方の神職の動向分析。

① 佐保神社の調査

同社が吉田家の播磨国東部の触頭としての役割を果たしていたこと、あるいは同地域に

おける垂加神道の広がりを確認し、旧稿「神学者」(横田冬彦編『身分的周縁と近世社会5知識と学問を支える人びと』吉川弘文館、2007)で示した内容を補強するものになった。また、吉田家門下の神職のネットワークが17世紀後半に形成されつつあったことを示したが(「十七世紀中葉における吉田家の活動—確立期としての寛文期」『国立歴史民俗博物館研究報告』第148集、2008年)、駿河の社家の蔵書が、そのネットワークを通じ、後世播磨の同社に伝えられた事実が確認できた。

②春日大社の調査

春日大社の若宮祭礼に焦点を当て、祭礼がどのように行われていたのかという実態調査と共に、祭礼の由緒の変化にも注目し、あわせて若宮祭礼の解説本として18世紀前半に上梓された「春日大宮若宮御祭礼図」の書誌とその背景について分析した。

祭礼由緒の分析では、若宮祭礼の創始が興福寺大衆によるものという記述が、当時の関白である藤原忠通の意思であったかのように書き改められていくプロセスを追った。忠通創始説は、寛文年中の春日社と興福寺との対立を経て、延宝期になって春日社が権威として氏長者を担ぎ出して誕生したものであった。同時期に賀茂社・出雲社・吉備津宮などで起った神仏分離運動の一つでもある。

その論理は、祭礼創始当時の氏長者が忠通であったという紛れもない事実、そして氏長者が春日社・興福寺の上に立つ存在であることによって信憑性を獲得し、その事実から新たな叙述をつむぎだした。

ところが、その後、享保期までには、興福寺へもその言説が流入していった。火災によって主要な伽藍を失った興福寺は、朝廷の支援を受けながら、幕府に伽藍復興を交渉していた。興福寺にとっても、朝廷(関白)がこの時期重要になってきており、祭礼の創始にもそうした背景が投影され、「春日大宮若宮御祭礼図」に記載されたことで、今日まで強い影響力を持つことになったのである。

その「春日大宮若宮御祭礼図」は、従来祭礼研究で頻繁に利用されていながら、筆者・書誌などが等閑視されていた。筆者は藤村惇叙という奈良の町人絵師であることを確定し、享保期の初版、寛保期の3冊本から、明治初年までの13種類の本を確認した。

詳細な記述・挿絵は、興福寺僧や春日社神職との深いつながりがあったこと、18世紀初頭は、奈良の歴史叙述が一つの到達点を迎えていたこと、そのきっかけが17世紀後半に行われた寺社の史料調査であることなどが明らかになった。寺社の史料が地域に開かれることで寺社の歴史が地域の歴史となっていくことが重要な論点となる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計9件)

①幡鎌一弘、白井雅胤が八神殿神璽を一条兼香に奉呈するに至った道のり—天理図書館所蔵吉田文庫白井本の紹介をかねて—、ビブリア、133号、査読無、pp.3-35、2010。

②幡鎌一弘、中臣和之日記(万治三年)、ビブリア、132号、査読無、pp.50-90、2009。

③幡鎌一弘、春日若宮祭礼日の固定と頭役制の変質、能と狂言、6、査読無、pp.99-107、2008。

④幡鎌一弘、藤村惇叙著『春日大宮若宮御祭礼図』の書誌とその周辺、奈良歴史研究、70号、査読無、pp.1-18、2008。

⑤幡鎌一弘、近世春日社における歴史のナラティブ—春日若宮祭礼創始説の再検討—、Regional、No.10、奈良県立同和問題関係史料センター、査読無、pp.1-19、2008。

⑥幡鎌一弘、十七世紀中葉における吉田家の活動—確立期としての寛文期、国立歴史民俗博物館研究報告、第148集、査読有、pp.331-356、2008。

[学会発表](計4件)

①幡鎌一弘「白井雅胤と白川家八神殿・大嘗会」、神社史料研究会サマーセミナー、2009年8月31日、日枝山王社・東京。

②幡鎌一弘「藤村惇叙著『春日大宮若宮御祭礼図』の成立とその背景」、神社史料研究会サマーセミナー、2008年8月20日、神田神社・東京。

③幡鎌一弘「近世前期における吉田神道(吉田家)の活動の分類」、日本宗教学会第66回大会、2007年9月16日、立正大学。

[図書](計1件)

①幡鎌一弘編、近世神道史研究と「御広間雑記」のデータベース化(科学研究費報告書)、(天理大学おやさと研究所・幡鎌一弘)、115、2010。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

幡鎌 一弘 (HATAKAMA KAZUHIRO)
天理大学・付属おやさと研究所・准教授
研究者番号：50271424

(2) 研究分担者

井上 智勝 (INOUE TOMOKATSU)
(財)大阪市文化財協会・大阪歴史博物館・学芸部・学芸員
研究者番号：10300972
(H19→H20：連携研究者)